

本当の教師は、学習者の心に火を点ける

未来の教育は、今よりも一段と機能の勝れた校舎に、勝れた教材・教具の完備した教室で行はれるやうになるでせうが、然し、教育の成否は結局「人に在る」のです。その最も好い例は松下村塾でせう。建物は狭隘な茅屋で、教材は一般の経書でしかありません。然も、松陰が村塾で教育に当たった期間は僅かに2年半に過ぎません。その村塾から明治維新の功労者が数多輩出したのです。

今、欧米の教育者たちの関心が日本の教育に注がれてゐますが、その主たるものが尊徳と並んでこの松陰です。松陰の人生は僅かに30年に過ぎませんでした。だから、その知識や経験がいかに勝れたものであらうとも、万人に勝れてゐたとはとても考へられません。もっと豊富な知識や経験を有った人間は、当時の日本には多くゐたはずです。だから、「教育は人に在る」と言っても、それは「知識や経験の多寡に依るものではない」といふ事が解ります。

「普通の教師は、学習者に向つてただ教へる。優秀な教師は、学習者に解らせる。然し本当の教師とは、学習者の心に火を点ける者である」とは前述しましたが、これは、欧米の教育者たちの齊しく観る所、口にする所でもあります。

では「学習者の心に火を点ける教師」とはどういふ教師でせうか。それは自身が火と燃えてゐる教師の事だせう。それで、学習者が師の火の焰に熱せられて発火点にまで高められ、その心に火が点くのです。品川弥二郎は師の松陰について次のやうに語つてゐます。「楠公討死の件を先生は涙を流しながら講義する。聞く者が12、3歳の少年であつても、先生は必死に読み、講義したのであつた」と。松陰は相手がどんなに年少の者であらうと決して手を抜きません。対等の者として扱ひ、全身全霊を傾けてその有てる総てを尽し、その心を揺さぶり続けたのです。

松陰は入獄した門弟に「獄中でも学問をしなくてははいけない。学問が足りないと、道理に明らかでない為に、笑つて死ぬことが出来ない」といふ手紙を書き送つてゐます。松陰の言ふ“学問”とはそのやうな学問です。今の「入試に備へる為の学問」とは全く違ふのです。今のやうな学問では、教師は火と燃えるわけがありません。